



Title	平和の名前
Author(s)	栗本, 英世
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 462-466
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56239
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平和の名前

栗本 英世

大阪大学大学院人間科学研究科教授

かつて国立民族学博物館で平和に関する共同研究が組織されたことがあった。北海道大学の小田博志准教授を代表者として、2008年度から4年間にわたって実施された「平和・紛争・暴力に関する人類学的研究の可能性」である。その成果は論文集『平和の人類学』として2014年に刊行されている(小田博志・関雄二編、法律文化社)。これは、日本における最初の平和に関する人類学的研究である。

ところで、この共同研究の最初の研究会で、私は「平和」という概念が、世界のさまざまな言語でなんと呼ばれているのか、比較してみたら面白いのではないかと提起したことがある。こうした提起をおこなった直接的な理由は、私が付き合ってきた人たちの言語に平和という語彙が存在しないことである。南スーダンのパリ語(Dhi-Pari)で平和を意味する語彙は、アラビア語からの借用語である「サラーム」(*salaam*)である。借用語ではないパリ語の語彙を見つけ出そうとして、複数のパリ人に尋ねてみたが、結局見つけることはできなかった。ただし、平和に対応する名詞は存在しないが、個人や社会の安寧や平安を表現する形容詞はある。冷たいことを意味するンギッチ(*ngic*)と、開けた、明るい状態を意味するワニィ(*wany*)である。望ましい状態を表す二つの形容詞は、儀礼的演説や祈願でよく用いられる。こうした用法は、彼らの世界観の一端を知ることができ興味深い。しかし、二つの形容詞の名詞型が、一般的に平和を意味す

る語彙として会話で使用されることはないのである。

ところで、パリ語の平和をめぐるこうした事情は、日本語のそれと類似しているのかもしれない。現在、だれでも知っている平和という日本語は、『日本国語大辞典』や『大漢和辞典』をみると、近代以前にはそれほど一般的ではなかったと考えられる。むしろ、和みや平安、泰平や太平といった用語のほうがよく用いられていた。いずれにせよ、これらは漢語である。それでは、平和を意味する和語はなんだろうか。それは、「たいらか」という形容動詞である。自動詞は「たいらぐ」、他動詞は「たいらげる」だ。私が、平和をめぐる言語表現において、パリ語と日本語のあいだに類似があると述べたのは、平和である状態を意味するときに、「たいら」という名詞ではなく、「たいらか」という形容動詞が使用されるからである。

さて、「戦い」を意味するパリ語の語彙は複数ある。まず、パリ人が全体として敵と戦う場合はマニィ(*many*)と言う。身体壮健な男性は全員が武器を携えて参加しなければならない。その人数は1,000人を超える。また、パリが敵に攻撃された場合に、これも男性全員が押し取り刀でただちに出動して行われる反撃はウドウル(*uduru*)と呼ばれる。「敵」には重要な家畜である牛を捕食するライオンも含まれる。ライオンが村までやってくることはほとんどないが、村から離れた原野にある放牧キャンプは、ライオンに襲われることがある。その知らせが村に伝わると、緊急信号である太鼓が叩かれ、男たちがただちに出発し、そのライオンをしとめることを目指す。放牧キャンプが他民族に襲撃され家畜が掠奪されたときも同様である。マニィとウドウルは「戦争」と訳してよいだろう。1980年代までは、携行する武器は槍であったが、その後は自動小銃が普及し主要な武器となっている。

こうした外部の敵との戦いのほか、少人数で行う放牧キャンプの襲撃と家畜の掠奪、パリ社会の内部で発生する、槍や銃ではなく棒を用いた戦いにも、個別の名称がある。つまり、平和には名前がないのに対して、戦いにはさまざまな名前があるのである。この事実

をどう理解すればよいのだろうか。

すぐ思い浮かぶのは、戦いが具体的で現実的である一方で、平和は抽象的なので名前がないのだろうという説明である。たしかに、戦いは事件であるが、平和は事件ではない。なにごともない、平穏な日常には名前を付ける必要がないという説明もありえるだろう。

パリ語と言語学的に近縁の言語でも、平和には名前がないのだろうか。パリ語は、ナイル・サハラ大語族のチャリ・ナイル語族、東スーダン語派のナイル語群の西ナイル諸語に分類される言語である。人類学でよく知られている、南スーダンのヌエル(Nuer、自称はNaath)人の母語はヌエル語(Thok-Naath)であり、パリ語と同様西ナイル諸語に属する。2015年8月に南スーダンの首都ジュバに滞在したとき、知り合いのヌエル人に「ヌエル語では平和をどう呼ぶのですか」と尋ねたところ、即座に「マール」(*maar*)であるという答えが返ってきた。興奮した私は、マールとは、こんにちわを意味する「マール」(*maale*)に含まれているマールであり、および親族を意味するマールではないのかと重ねて尋ねたところ、「そうだ。よく知っていますね」ということだった。親族関係の用語としてのマールは、正確には婚姻を通じて形成される非父系の親族関係を意味する。つまり、母方の親族や、父の母方の親族のことである。ここで、謎がまたひとつ増えてしまった。なぜ、母方の親族を意味する語彙が、平和も意味するのだろうか。

この謎は、すぐに解くことができた。帰国してから、長年ヌエルを研究しているアメリカの人類学者、シャロン・ハッチソンから新しい論文が出たので読んでほしいという連絡があった。この「暴力、正統性、予言——南スーダンにおけるヌエル人の不確実性との苦闘」という論文(Hutchinson, S. E. and N. R. Pendle (2015) "Violence, Legitimacy and Prophecy: Nuer Struggles with Uncertainty in South Sudan." *American Ethnologist* 42(3): 415-430)では、なぜ、親族を意味するマールが平和も意味するのかについて、説得的な議論が展開されている。ヌエルの社会の基礎集団は、英語ではクランやリニヰジ

と呼ばれる父系出自集団であり、戦いはこれらの集団間で発生する。父系出自集団は外婚の単位であるので、つまり同じ集団に属する男女は結婚できないので、結婚相手は他の出自集団から求めることになる。こうして、父系出自集団のあいだには、婚姻を通じた姻族関係と母方親族との関係の網の目がはりめぐらされていく。マールの紐帯は、他民族集団との婚姻を通じて、民族集団の境界も越えて発展する。そして、この紐帯は、集団間の戦いの拡大を防ぎ、戦いが終息したあとの和解を促進することに役だっている。つまり、マール関係は平和を保障している (p.422)。このゆえに、ヌエル人はマールという親族関係の用語を平和を意味する語彙としても認識しているのである。

したがって、ヌエル語におけるマールという平和概念は、抽象的なものではなく、生活実践に根ざした具体的なものであるということができる。

じつは、ハッチソンが論じたような実践的で現実的な平和概念は、南スーダンと国境を接するエチオピア西南部のダサネッチ(Daasanach, Dassanetch)人の研究でもすでに報告されている。ダサネッチは、近隣の他民族集団と、主として牛の掠奪をめぐる、戦いを繰り返してきた。戦いは、ときには数百名が死亡するような大規模で激烈なものに発展することがある。佐川徹が2011年に刊行した民族誌『暴力と歓待の民族誌——東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』によると、ダサネッチ語には「シミティ」(*simiti*)という概念がある。ところで、ダサネッチの生活様式や文化にはパリやヌエルと共通する部分があるが、言語的にはまったく別系統である。ダサネッチ語は、アフロ・アジア大語族のクシ語族に属する言語である。さて、佐川はシミティを「平和」と訳している。それは「単に『戦争がない』という消極的な状態を指す語ではないし、ダサネッチが襲撃のおそれに苛まれずに自足的な生活ができている状態を指す語でもない。集団間の緊張関係によって途絶えていた相互往来が回復して旧交を温め、交易や共住をきっかけとして新たな社会関係が形成されている状態、

つまり各個人が集団境界を越えて積極的に他者との友好的な相互行為を重ねている状態が、シミティの意味するところである」(338頁)。ダサネッチ語のシミティは、ヌエル語のマーレと同様、日常的な生活実践に根ざした具体的な概念であるといえる。

この小文では、三つの言語＝社会における平和の概念について考えてきた。北東アフリカ、あるいは東アフリカと呼ばれるこの地域には、数百の言語＝社会が存在するので、そのごく一部を取り上げたにすぎない。しかし、ここでの検討からあきらかになったのは、パリ、ヌエル、ダサネッチのいずれにおいても、抽象的な意味での平和と訳すことが可能な固有の語彙は存在しないこと、ヌエルとダサネッチのように平和と訳すことができる語彙が存在する場合は、日常的な生活実践に根ざした具体的な意味内容を伴っていることである。このことは、平和の固有概念に関する比較研究への道をひらくだけでなく、そもそも平和とはなにかという問題を考えるうえで、おおきな示唆を含んでいる。つまり、私たちが日本語で平和を語るとき、どの程度生活実践に基づいた具体的問題として捉えているのかについて、自省を迫る契機が含まれている。

最後に、『未来共生学』のエッセイで、平和に関する語彙をテーマとしたのは、平和の問題は、共生の問題と不可分であるからにほかならない。平和（および戦争）を考えることぬきで、共生を考えることはできないだろう。この小文で論じてきたことを未来共生の課題に応用するとしたらどうなるだろうか。私の答えは、未来共生の実現可能性は、日常的な生活実践に根ざした共生を想像する力を、私たちが獲得できるかどうかにかかっているということである。